

或る日の授業から

篠澤 菜穂子

先日、「かもめのジョナサン」の冒頭を高校二年の教材として扱った。一読後の感想を簡単にまとめさせた時のことである。

普段は、感想を書きなさい、と言うと、もうそれだけでアゴが出てくる生徒が多い。メンドクサイと口に出す子もいる。だから、今回も、どうかな？というのが、正直なところだった。取りあえず、読み始めると、いつも落ち着きのない子まで、静かに教科書を読んでいるようなので、内心、アレっ？と思った。5ページという比較的短い量であり、内容も親しみ易いものだったせいもあるだろう。

しかし、私が驚いたのは、どの生徒もいつもより、ずっと真面目に感想を書いていたからだ。ひいき目というのがあるかも知れないが、確かに「考えて」書いている顔だったと思う。

「先生、私、馬鹿だから、今更やったって駄目だよ」なんて言って、ノートを取るのをおっくうにしていたりする子が、顔を真っ赤にして、配った用紙を腕んでいたりしたのだ。

感想の内容や、表現について力の差にばらつきはあったが、ほとんどが「自分の言葉で書いた」と感じられるものだった。

しかも、多くの生徒が、「この話の続きを読みたい」というのだ。

腹の足しにならないジョナサンの飛行訓練に、なにか、そのままにしておけないものを一人一人が、感じたいらしい。「生きるとは何か」という問題に引き込まれた、そんな手ごたえがあった。

顔を真っ赤にしていた子は、ただ一行「ジョナサンはエライと思った。」だったが、一度も催促されずに、自分から進んで、書いたのは進歩だと、私は思った。

こんなことがあると、「人間って面白い、捨てたもんじゃない」と思えて、どんな生徒に対しても教師として、自分からは、匙を投げないでいようと思ってしまう。

何が「へきっかけ」になるかは誰にも分からない。しごく何気ない事かもしれないし、必ずしも教師の一言とは限らないだろう。

だが、何かきっかけを掴みさえすれば、授業に興味を持っていない子や、反抗的な態度の子も、ある日、突然(あるいは、だんだん)変わりはじめるかもしれない。

この「かもしれない」の可能性がある、百分の一でも、それ以下でも、信じてい気がする。

高校の教師として四年。教師と生徒を取り巻く「現実」が、そんなに甘くないことは、だんだんわかってきた。きれいごとを言う気はない。だが、どうせなら、「良くなる」方に賭けたい。彼らの可能性を信じることは、私の可能性を信じることでもあるのだと思う。

(大宮開成高等学校講師)

マークシート雑感

名 越 覚

今、入試問題作成のさ中である。  
さて、ここに私が紹介しようとしているわが校のささやかなエピソードも、まさにその入試問題作成に関わるものである。というのも、今回初めて国語科会議の席上でマークシート方式の導入が提案され、そのことに関連していろいろと考えるところがあつたからである。

もちろん、マークシート方式それ自体は、「共通一次」に代表されるごとく、今や大学入試においては極く一般的な試験方法である。それに、一時に大量の受験生をふるい分けるのには実際とても便利なやり方でもあろう。

しかし、それは、仮に必要悪ということでも悪であることにかわりはないわけで、それが中学や高校の現場に登場してくること、及びその趨勢は坐視できぬと思うのである。

とはいっても、別に私はコンピュータ拒否症にとりつかれてゐるわけではない。どちらかというとその魅力にいささか毒さされてゐる方で、今夏なげなしのボーナスをはたいてパソコンを購入しもしたくらいである。

無駄口はさておき、とにかく私は今回の提案には一貫して反対の立場をとってきた。ただ、それ程確たる信念があつての否定論ではないので消極的ではあつたが、そこに私なりの論拠が

なかつたわけではない。

ところで、少し話が脇道にそれて恐縮だが、私たちの所では昨年から成績処理をコンピュータでやつてゐる。もつとも通信欄は別だが、成績や欠席数などの数字部分の全てを点票交換日の放課後コンピュータ教室で一斉に入力し、成績表を作成するのである。

そして、実は、マークシート方式の入試問題についての私の懸念も具体的にここに端を発するのである。

確かに、こうして出来上つた成績表は端整である。しかし、点票への転記ミスがそのまま入力されるなど、何かすき間風のようなものを心に感じ、生徒一人一人の顔を思い浮かべながら教務手帳から点票へ、点票から成績表へ転記する作業や時間は本当に省いてよい無駄なのだろうか、という思いを今なお消せないでいる。

私たちの向き合つてゐるのがたとえファミコン世代であつても、いやオンとオフの機械語にしかなじまぬ世代であるからこそ余計に、教育現場での疎通のチャンスは殊更大事にしなければならぬのではあるまいか。「教師の立場」がクローズアップする時、あるいは疎外の種子が播かれるのはそんな時なのであるまいか。

ともあれ、そのことに留意して確固たる歯止めを用意しないなら、とめどなく一方(省力化)に傾斜していく危険性を現代ははらんでゐる。

とりわけ、そういう風潮の中で、人間的な感動の源である想像力と構成力が若い世代(生徒ら)の内面で急激に衰弱していく事を私は恐れるのである。

(日本学園高等学校)

語彙力を育てる

那須 広 志

教鞭を執るようになって、早くも五年目を迎えようとして  
いる。最初の二年間は、代替講師をしていた為、二校程経験す  
ることができた。前任校に比べて現勤務校でいえるのは、語彙  
力があまりにも貧困だということである。生徒の会話を聞いて  
も然り、作文においても日常会話語の範囲内で記されている。  
けだし国語の授業が彼らの身につかず、通り一遍のものに  
終わってしまったのではないか。それも受身的な授業なら  
尚更である。指示されない限りは辞書を机の上に出そうとも  
せず、質問を受けても考えようとししないで、黒板に書いたも  
のを必死に書写するだけで事足れりとしている状況では、如何  
ともし難い。

先月、現国の授業において「山月記」を取り挙げた。表現の  
面で、難しい語句が多々あるし、ことばの抵抗が大きく、生徒  
は理解できるだろうかと思念を抱いた。しかし、どうしても多  
感な時期に読ませたい作品だったので扱った。机上版の辞典に  
載っていない語句は説明を施し、他は授業中に、なるたけ辞書  
を引かせ意味を調べさせた。本来なら意味調べは予習段階に入  
るはずだが、辞書の引き方も知らない生徒も少なからずいると

いう現状と、辞書を引く習慣を養わせることに重点を置いてい  
るといふ理由から、授業中に一斉指導を行っている。

その後、内容読解の方も、時間をかなりかけて読み進めた。  
先の作業で、ことばも自分なりのものになったためか、以前の  
授業と較べて、内容読解の点においても進歩が見られた。

それから、単元が終わる度毎に、ことわざを五つずつ呈示  
し、それを使って、短文を作って提出してもらっている。それ  
は、今年の四月当初に、「ことわざで、『人を見たら』その次は  
何といふかな。」と尋ねてみると、意外にも、「挨拶しなさい」  
と真顔で答えた生徒がいたことに起因している。その時、啞然  
としてしまったが、これは何も生徒自身が悪いのではない。授  
業中あまりことわざを使用しない教員である私にも非が認めら  
れるし、また、世間でも豊富にあることわざがだんだん廃れて  
きていることにも因るだろう。とにかく、短文を作らせたこと  
で、生徒の口からも少しづつことわざが聞かれるようになって  
た。

「国語教室」(32)という雑誌の「悪文教師」を読む度に、  
私は身につまされる思いがする。生徒の国語力の伸長を左右す  
るのは、現場の教師が、己の言語生活を厳しく省み、かつ、豊  
かになるよう修養しているか否かが決まるという。私は、力量  
不足から生徒達の学習意欲を減殺しているのではないかと思  
いを駆せることがある。もっと言語感覚を練磨して、力のある教  
師になりたいと思う。

(東京都立拜島高等学校)

戦争を扱った教材について

藤井 小百合

今年の中学一年生、二期期の学習は、「平和への願い」と題された三つの文学教材から始まった。米倉齊加年氏の「大人になれなかつた弟たちに」、金井直氏の「木琴」、フィリップ・ピアス氏の「水門で」である。いずれも一人称（ぼく、私、わし）を話者として、戦争で肉親を失った人々の深いいやされない痛みが描かれている。その叫びが素材であるだけに、読み手には、戦争の持つ大きな力が容易に理解できる優れた作品である。今回の学習でも、生徒達は語り手に寄り添う同化体験（共同体験）を通じて、ごく平凡な家庭から、大切な人々（兄、妹、弟）が奪われ、生活の中に深い痕跡を残して行く姿を容易に理解していた。戦争は多くのものを奪っていく。最後に残るのは肉親（家族）の絆、愛だけかもしれない。そんな感想を述べた者も多かった。

ただ、私としては、生徒と学習しながら、いくつかの困難点を感じたことも事実である。これからの戦争教材を学習する際の私自身に残された課題と言えるものである。

一つは、二十代の私自身が、生徒達と同じように「戦争を知らない」世代だということである。知らないから教えられない、では教師としては失格だが、どうしても認識の甘さがあるのではと感じられる場面があった。

実は幸運にも、この夏、私は米倉氏の講演を聞いた。その中で、彼は「私は作品が教科書に採用され、全国各地から生徒さん達の感想文をおくってもらうようになりました。その中には、なんと戦争は悲惨なものなんだろう。」と書かれているもの

があります。でも、私はそんなことは一言も書いていません。僕にとつての戦争とは、とにかく食べるものがなくて、「ひもじい」ものだったのです。そして、そんな僕を守ってくれたのは母だけでした。」と話してくれた。そして、正直、ショックを受けた。私自身、高度成長期に育ち、「ひもじい」と感じたことはない。しかし、戦争の持つ大きさ、生活に与える影響をこれほどわかりやすく言う言葉はないのではないかと。実体験の重みとともに、「悲惨だ」「怖い」だけでは伝わらない、事実を勉強し、伝えていく責任を強く感じた。

二つ目の課題は、日本人として戦争を考えるという視点が、教材選択の際、薄いのではないかという点である。中学三年間の光村図書の教材を見ても、被爆国としての日本、戦災をうけた被害者としての教材はあっても、東南アジア、中国、朝鮮などに對する加害者としての日本人を見つめる作品は掲載されていない。私には、これからの世代である生徒には、過去と向かいあうような「加害者としての日本」を見る目を育てることも大切なことに思える。

そして、最後、三つ目の課題は、では、これから、文字通り「平和への願い」を実現するにはどうすればよいかという考えを少しでも生徒の中に育てることだと思ふ。感想の中には「私はあの時代に生まれなくて良かった。」「あの人達は可哀想だ。」というところで終ってしまうものもあった。読解をつきまけて、問題意識を持ち、それを育てること、言いかえれば現実から未来をみつめようとする芽を育てていくのは、なかなか難しいことである。実際には、学校現場一つとっても、君が代、日の丸問題、天皇の病気による学校行事等の自粛、臨教審など、目に見えぬいやなものも少しづつ影を落としてきている。私自身でも、生徒達にどう伝えればいいのかわからないが、「無批判でも、無関心でいることこのわざ」だけは、折にふれ、話していきたいと思っている。

(東京都町田市立つくし野中学校)